



やまなみ

日本山岳会福島支部報 創刊号 2011. 8. 1
事務局 福島市笹谷字城場9-10 大谷 司方



65周年行事で目ざすカラコルム山域

山への恩返し

福島支部長 大谷 司

私が子供の頃は、外で遊ぶのが当たり前で、公園などではなく、小学校にある遊具といえばブランコとジャングルジムでした。そんな遊びではなく、上の学年のお兄さんを頂点として、縦割社会の小学生軍団がやったことといえば、季節によって異なりますが、世の中全体が貧しいこともあり、意外と生産的でした。せりつみ、のびる採り、「どう＝うつぼという地方もある」をつかってのどじょう捕り、蜂の幼虫やみみずを餌にしての魚釣り。どれもこれも上級生＝ガキ大将におそわっての遊びでしたが、現在と決定的に違うのは、それ等がすべて家でのおかずになったことです。今流釣りのキャッチ＆リリースなんて、考えもしませんでした。

そんななかで楽しみだったのは、大人の人が連れていってくれた秋の飯盒炊さん。桑折町在住だったので、半田沼で毎年行ったものでした。

昼食後、元気のある子供達は、大人に連れられて半田山の頂上まで。条件が良いと霊山の向うに

太平洋を観ることができました。それが、私の登山の原点かも。

中学3年の夏に、父に連れられて、初めて吾妻山登山をしました。ヌルユ湯泉に泊り、日本山岳会マナスル遠征隊が持ち帰った植物を、今は亡き哲三氏が父に説明しているのを、脇で聞いて感激し、浄土平では、「成程、極楽浄土の浄土平ダ」と納得し、吾妻小富士に登っては、溶岩がザクザクで、踏ん張っても高度が稼げず、蟻地獄とはこういうもんかと想像しました。

この年の翌春、高校生となり山岳部に入部。クラブ山行は、月に1回ですので先輩方に頼んで、吾妻山を中心に連れていって貰いました。家形ヒュッテや吾妻小舎は宿泊料がかかるので、泊るのは、もっぱら、桶沼のそばにあった無料の「呑気小屋」。ザックは、片桐の2尺キスリング。シュラフは米軍放出品、雨具はこれも、米軍放出のゴム引きポンチョ、スパッツがなくて、当時まだ売っていたゲートルを着用。それでも、ストーブは「ス

ベア」を使っており、得意満面で行動していたのですが、何ともしぐはぐな、貧乏たらしい高校生でした。

当時の呑気小屋には、夏場、高山ぶどう＝くろまめの実を採る人達も泊っており、今では考えられないことですが、許可を得て、小富士の裾野やねはん坂辺りで1日に1斗缶一杯は採取しておりました。この頃、浄土平付近でのスカイライン工事は行われておらず、この翌年、冬も間近の11月5日に開通します。

当時の観光開発とは、自然と共存ではなく、掘り伏せることだったのでしょうか。道路をつくる際にでた岩石、土砂は、浄土平の湿地帯に投入され、現在の駐車場の原型となります。翌々年、私が高校3年の夏には、土産物や、うどん、そばを商う掘立小屋の集落が、浄土平にでき、小富士をバックに撮る写真屋も開業。トイレも水もない場

所での営業です。これは後に、県の指導を受けパークセンターとなりますが、現在、組織そのものが解体しております。

私が登山に目覚めてから、50余年が経ち、世の中には、自然保護を訴える方々が大層増えましたし、役所もそれなりの努力をしております。当支部員の皆様も、山に対してその必要性和、今まで遊ばせて貰った恩義は充分感じておられるでしょうが、平均年齢67才の支部員各自では、でき得ることは限りがあると思いますので、皆で知恵と力を出し合って、「山への恩返し」をしませんか。東吾妻登山道の刈り払いは支部事業で、裸地になってしまった吾妻山の登山道復元を有志で、現在行っておりますが、他の山域にもこれ等の活動を拡げられればと考えております。

これからも世話になるけど、随分遊ばせて貰ったしネ～。

支部創立65周年行事へ向けて

海外登山実行委員長 佐藤 一夫

1947年12月生まれの私は、偶然にもJAC福島支部の誕生日と同じで来年の12月に65歳を迎えます。1983年入会以来、誕生日が同じであるとの理由からクラブへの親近感を人一倍感じていたものの、転勤の多かったサラリーマン現役時代にはなかなかクラブ行事へ参加できずにいました。

定年を迎えてふるさとに戻って来たのを契機に、ようやくクラブ行事へ顔を出せるようになりました。最初は知り合いも少なく、参加することに戸惑いを感じ少し勇気が要りました。しかし、実際に参加してみると、所詮山好き仲間の集まり、不安は一瞬に解消され、山の話は尽きず、話は次の山行計画にまで発展する始末です。今ではクラブ仲間とクラブライフを大いに楽しんでいます。クラブ行事への参加を躊躇されている方、少し勇気を出して参加してみても如何ですか。クラブ仲間も何かのご縁、事情の許す会員の方々、「会費会員」から「出逢い会員」へ変身しませんか。多くのクラブ仲間がお待ちしております。利害関係や損得関係のないクラブ仲間同士、勝ち負けのない山を、一緒に登り・歩き・語り、楽しみましょう。

60半ばを迎え、歩いた山々を思い出しては、「山を想えば人恋し・人を想えば山恋し～百瀬慎太郎氏の名言～」の心境が解かる歳になりました。今まで出逢った多くの山仲間感謝し、これからの新たな山仲間との出逢いに期待し、65周年行事を大いに楽しみたいと思っています。

行事の一つである海外登山については、目標地

域であるカラコルム研究の第一人者である宮森常雄氏(当会会員・会津若松市在住)の指導、参加を得て実行されます。宮森氏が率いるカラコルム登山に過去2回(2007年7月ラシュパリ峰5,090m、2009年6月リリオチッシュ峰5,708m)参加させていただきましたが、出掛ける度に、カラコルム山脈の限りなく広く、高く、神々しい峰々に驚き、身近に眺められる名峰の数々に満足し、言葉では言い尽くせない景観に感動を覚えました。

当時の日記には次のような感動記録も記されています…ガイドのアミン氏(今回もガイド兼登山隊員として参加)を始め、現地ポーター、現地村民からの暖かい歓迎と、心のこもったおもてなしが嬉しかった。ラミンジ村(登山基地)では、村をあげての大歓迎、村長からの熱い長い歓迎の言葉が印象的であった。登山中に誕生日を迎えた全隊員(5名)の誕生パーティーが、誕生日の当日、それぞれの場所で開かれ感激した。標高5,210mのC2へもハイポーターがパースデーケーキを担ぎ上げた。危険箇所(特に深い谷あいの狭い道)では、ガイド、ポーターが終始我々の行動を見守り、全力で安全確保に努めてくれた。日・全隊員と現地スタッフとの心温まる交流が嬉しかった…。

クラブ仲間の方々、新たな驚きと感動を求め海外登山と一緒に楽しみませんか。過去の経験を活かし、安全第一登山を目指しますので奮ってご参加下さい。クラブ仲間との新たな出逢いを楽しみにしています。

私の山と人

安藤 治



私の山登りは、山菜・きのこ採りの延長線上にあるような気がしてなりません。山行に関する記録は殆んどと言っていいほど残されていません。記憶を頼りに書く代物ですから、信頼性に欠けるところが多々あることを前もってお断りしておきます。

・最初の夏山登山

昭和25年の夏、一切経山に登りました。コースは奥羽線板谷駅から、五色温泉－青木小屋－家形小屋－五色沼畔－一切経山頂－吾妻小舎(泊)、翌日、吾妻小富士－ぬる湯温泉を経て水保に下りました。水保から福島へ何で戻ったかは定かではありません。

ただ、天気が良くて沼の周辺は明るい薄茶色、中心部に向かってだんだんと深い藍色に変って行くさまは正に五色沼、どうしてこんな高い山の中に湖ができたのかという不思議な思いと、一度水しぶきを上げて泳いで見たいとの思いがあったことは今も記憶しております。

・同じく冬山登山

昭和27年の年の瀬、定時制県立第二高校生徒でもあったころ、同級のS君と二人で安達太良山を

目指しました。岳温泉までは鉄道、バスと乗り継ぎ、岳スキー場の下部から湯樋沿いに烏川－勢至平－安達太良ヒュッテ(現在のくろがね小屋のできる前の小屋)泊り。翌日山頂を目指すつもりでの山行でした。その年の半ばごろ、「たかはし」の山靴を新調し、兵隊で履いていた編上靴におさらばし快適な登山ができるものと確信していましたが、靴底に打ってある鉄釘に雪が凍みついて大きな雪ボッコになり、歩行甚だ不安定。おまけに小屋は案内書に書いてある状態とは大違いで、暖房は囲炉裏に先客の大学の山岳部らしき連中がおこした炭火のうゑに生かわきのカラマツの丸太が2、3本くべてあって、それがブスブスと煙りを上げていました。寝具はワラぶとんとすいせんべいふとん1枚きり。煙いは寒いはず、眠れるものではありません。翌朝は一晩燻されて臉が腫れあがり、山登りどころではありませんでした。文字通り這う這うの体で退散いたしました。

・山小屋の思い出(JACの会員になってから～

昭和〇年〇月〇日、吾妻小屋一泊スキーツアー)

支部冬山行事として実施しておりました。参加者は伊藤支部長、ムーさんこと武藤清次さん以下十数人の大パーティーで、高湯温泉慶応の小屋から五色沼、湖面を横切って一切経の鞍部でシールをはずしてひと息入れ、板状クラストでスキーをバタつかせて鎌沼目指して一気に滑降。それがそうは行かないボーゲン、横滑り、顔制動などなどあらゆる技術を駆使して鎌沼へ。南へ回ってダケカンバの林の中、粉雪を蹴散らして吾妻小屋に到着。

二階の部屋は既にストーブが焚かれていて別世界。夕食の出るのを待ちかねてザックからは一升びん、だるま状のびんがテーブルに並べられる。伊藤支部長はダンヒルのパイプをくゆらしながら悠然として飲む。かたわらでムーさんは暖機運転の域を超えて快調です。

メンバーが揃ったところで乾杯、雰囲気盛り上がり、次々とびんが横にならべられて行く。飲みのムーさんが皆んなにせがまれて滅多に蔵出しされないフランス民謡「村外れの橋で」を歌い出す。シャンソン風のメロディーがムーさんの唇から流れ出す。私は手回しオルガンを奏でる仕草でムーさんの後について回る。ムーさんの歌うメロディーは、アルゼンチンタンゴ「たそがれのオルガン」

を連想、口オルガンの伴奏とあい成った次第です。伊藤支部長の十八番、日本舞踊「旅の夜風」が出たかどうかは最早霞の彼方、記憶はおぼろです。

翌日は夕べの酒毒を撒きちらしながら、東吾妻山－鳥子平－高山－土湯温泉までダウンヒルオンリー。持てる技術のすべてを駆使して終点の土湯温泉に到着しました。

伊藤支部長には仕事の関係で御指導と御交誼を賜り、それがご縁でJACに入会を許されました。

【集 会 報 告】

〔山の日制定と自然保護のPR〕

雨天のため1週間延期した6月5日(日)、安達太良山において実施した。朝、奥岳に到着すると曇り空で強風。登山者が少ないのではと心配されたが、さすがは人気の山、ゴンドラの運行時間に合わせるように増えてきた登山者に「山の日」制定のチラシと、支部で作成した自然保護を訴えるチラシを配布した。

終了後は安達太良山、くろがね小屋、勢至平を経て奥岳までの清掃登山を行った。

山頂付近は濃霧と強風ではあったが、牛の背から下ると岩の間にミネズオウが満開で、さながら山上の庭園のようであった。

集めたゴミはサブザック1個分。運搬役はなんとなくSさんをお願いしてしまった。

〔埼玉支部交流会〕



6月11日(土)～12日(日)の2日間、埼玉支部との交流会を開催した。初日は雨上がりの青空のもと、浄土平から鎌沼を1周した。姥ヶ原にはチングルマが咲きはじめ、涼しい風の中の散策を楽しんだ。

下山後は宿泊する磐梯沼尻高原ロッジへ。午後6時過ぎから28名による懇親会を開催、ロッジのオーナーでもある田部井淳子さんも参加してなごやかな懇親会となった。

12日は沼尻登山口から安達太良山を目指した。

そして、本県山岳会の先達や同僚各位の御交誼、御支援により昨年永年会員に推挙いただきましたが、在籍しただけの会員で内心忸怩たる思いで一杯です。本稿も取り留めのないことを書きならべました。埋草に役立てていただければ幸いです。〔備考〕武藤さんが歌った「村外れの橋で」については、同氏遺稿集「種蒔きうさぎ」(38頁)に工藤績氏が「愛唱歌」という題で書かれ、楽譜も掲載されております。念のため。

大ぶりのツバメオモト、サラサドウダンの群落、障子ヶ岩付近からの吾妻山の展望などに感動しながら安達太良山に到着した。

昼食後に奥岳に下山。折しもムラサキヤシオが真っ盛り。どこまでも花に彩られ、花街道と呼びたいほどの登山道であった。

午後2時ころ、名残は尽きなかったが埼玉支部を奥岳で見送り、楽しみにしていた交流会は終わった。

〔植生復元作業〕

「吾妻山は荒れている…」。裸地化した酸ヶ平や姥ヶ原を通る度に感じる人が多いと思う。

そこに、平成16年からヒメスゲの種をまいて緑を取り戻す作業を続けている吾妻山自然倶楽部。支部として初めて復元作業に参加した。

6月18日(土)、支部から8名が参加し、まず旧吾妻スキー場のゲレンデでヒメスゲの種を採取した。どれがヒメスゲなのか、どう採取すればよいのか、手解きを受けた。

約50名による採取は1時間で終了、浄土平から酸ヶ平に向かった。種蒔き方法の指導を受け、張られた保護ネットの上からヒメスゲの種をまいた。見ると、かなり成長したヒメスゲがある。マルバシモツケも定着しはじめた。ネットの網目を広げ、丁寧に出してやる。

種をまき、土に触れ、あらためて吾妻山は荒れた、しかし回復させなければ…という思いが深まった。こうした作業を地道に継続してきた吾妻山自然倶楽部を敬服せずにおられない。そして、「吾妻山の品格を保たなければならない」という主催者の山への愛着心が強く伝わってきた1日であった。

(編集部)